



小さな社会としての学校

学校に中々足の向かない子供や、保護者と話す中で、「学校は何のためにあるんですか?」という問いを投げかけられることがあります。確かに足が遠のいてしまうと、学校の存在意義に疑問をもつこともあると思います。また、親から「学校へ行きなさい!」と叱咤激励の声を掛けられる場面もあるでし

よう。そうすると、子供の迷っている心が頑なになり、好転することは難しくなることも想定されます。ただ逆に背中を押されて行こうと決意することもあるでしょう。励まし方は昨日の「わくわく通信49号」の「子供のやる気を引き出す!」事例を参考にしてください。

そもそも学校に行くには大きなエネルギーを必要とします。私も教諭時代、あまりにも仕事に追われて、日曜日のサザエさんを観ていると、気持ちが沈んでいたときもありました。そういうことを考えると、月曜日の声掛けはとても大切に思えます。

さて話を元に戻すと、学校はなんのためにあるのでしょうか?明治期に学校をつくったのは「富国強兵」のためでした。1872年に学制が公布され、小学校から大学までの学校制度が定められたのです。特に小学校での教育が重視され、満6歳になった男女は小学校に通うことが義務付けられました。それでは、現代ならどう捉えることができるでしょうか?平たく言えば「社会人として生きていくために、必要不可欠な知識と考え方を学ぶため」となるでしょう。私は、学校は小さな社会と考えています。子供たちはその小さな社会の中で、学び・遊び・友達とかかわり・協力し・助け合い・創造力を発揮し・自分の役割を果たし・自己有用感を味わっていきます。そのために、多くの失敗や成功を繰り返しながら学んでいきます。その失敗の中の一つに、ケンカなどが挙げられます。そこに多くの緊張やストレスが生まれますが、そこにも重要な意味があるのです。人が成長していく過程には、「きついこと・辛いこと・悲しいこと…etc」がたくさんあります。それらと付き合うことも成長の糧になるのです。現代では事なかれ主義が多くなり、子供たちの耐性が弱くなり、心身の抵抗力や免疫力が付かないまま育つ恐れがあります。確かに、これらのストレスに耐え切れずに、学校に行けなくなる子供もいます。そこで必要なのは、話を聞いてくれる友達や保護者、先生など「頼れる誰か」の存在です。

学校は、小さな社会として子供たちの成長には必要不可欠です。一方で学校に足が遠くなった子供には、学校と繋がり合いながら、登校を見守り、子供たちの成長を共に考えていくことが重要だと考えます。そのためには、大人の温かい眼差しが必要となってくるのです。そして、学校はこれからも、子供たちにとって、「わくわく」する場を多く生み出し、魅力ある校風を創っていきたいと思っています。

学年集会

今朝は、学年ごとに学年集会が行われました。全体で共通理解したことは、最近休日になると学校の運動場に、ペットボトルやお菓子の袋が落ちています。そういうことへの問題意識を子供たちに考えてもらいました。また、中学年以上には人間関係で気を付けること、4年生以上には学校での自転車の乗り入れの仕方や駐車する場所の確認など、実態に応じた学年集会に取り組んでもらいました。今日からの生活に生かして欲しいと思います。

